

ると説く。

卷二において一心が諸法をなす例として、火が草や木に燃え移った時いろいろな燃え方をするように、あるいは水が酒や熱いお吸い物になることを挙げた上で、「任立千途、皆是一心之別義」と結ぶ。これは明らかに鏡と像が絶えず一体であることを示している。『楞伽經』では第八地以上の境界に達し、自覚智を得た者が享受するとされる「如幻三昧」及び類語が多々見られるのだが、『宗鏡録』にて『華嚴經』等の諸經の例を取りながら「如幻三昧」は学すべきものであり、これによって真実を悟ることができるという幾度も強調する。

如来蔵を絶対視することによって、人間の生の実感を消滅させたのでは修行の意味はないし、仏教の伝播も考えられない。三者が「鏡像の比喩」で説いたのは如来蔵大悟の瞬間ではなく、その前後も生き続ける人間の姿、「生きた禅修行」だったのである。

## 第八部会

### 日蓮の宗教性の原体験

——正嘉の大地震と禍の預言の形成——

笠井正弘

一 問題の設定…内村鑑三『代表的日本人』の日蓮像  
内村が、日本人にとって最も誤解されている人物、とみなしたのは、日蓮の〈宗教性〉の本質に、ユダヤ・キリスト教文化の中核をなしている〈真性の預言者〉としての宗教性が感得されたからである。この宗教性は歴史的個性として新旧聖書世界を形作ってきた。問題は、なぜ日蓮に〈真性の預言者〉的宗教性が現れたのか、そして何が日本人に日蓮を解らなくさせているのか、にある。それは預言者宗教の歴史的個性に関わる問題である。

二 マックス・ヴェーバーによる〈預言者類型〉…『世界宗教の経済倫理』より  
〈使命的預言者〉…〈模範的預言者〉…〈禁欲主義〉…〈神秘主義〉  
〈神の道具〉…〈神の器〉…〈人格的神観念〉…〈非人格的神観念〉  
〈禍の預言〉…〈招福の預言〉…〈血(現世)の評価〉…〈血の評価〉

三 〈禍の預言〉の〈禍〉の内容…地震・飢饉・伝染病・彗星出現・他国からの侵略など、人智で制御できない現象を指して

いる。これらを天罰や偶発的なもの、運命だと見なし、祈禱師や呪い師など宗教的達人の手で排除しようとする宗教類型をヴェーバーは呪術と呼び、「模範的預言者」と親和性があると見なした。ここでは神は人格性が希薄で、人間の側の欲求を成就する機能的存在に位置付けられている。仏教は一般的にこの類型に入る。

それに対し、それらを神によって決定づけられた〈宿命〉と受け止め、自らが選ばれ、神の人格的召命を託されたものとして受け入れるのが〈使命的預言者〉である。個人的・社会的受難はすべて神の真性の証明とみなされる。古代ユダヤ教の預言者たちや、近世プロテスタントの信仰者がこの類型に入る。

#### 四 日蓮の原体験としての〈正嘉の地震〉

正嘉の地震は正嘉元年(一二五七年)日蓮三九歳八月二三日夜半発生し、関東は地震と津波の大被害を受けた。『吾妻鏡』によれば、寺院社寺、武家屋敷をはじめ民家もことごとく倒壊し、火災によって半数の人が焼死した、とある。また、その後天変地妖が相次ぎ飢饉・疫病が蔓延した。この体験は日蓮の預言の書『立正安国論』執筆の大きな動因となっている。

五 招福の弁神論・出発点としての災害天罰論『守護国家論』の立場 天台山門系密教僧

日蓮の自己イメージの構造変革・常不軽菩薩へのアイデンティティ→地湧菩薩の先駆→到達点としての上行菩薩へ

#### 苦難の弁神論(日蓮的宗教性の本質部分)の形成

正しいものが何故受難するのか→受難こそ正しい信仰者の証 常不軽菩薩の自覚→自我理想としての受難する釈尊→釈

尊の正しさの証としての災害→現世の救済の約束→久遠の本仏の感得→理想自己の完成 上行菩薩としての内的自覚

#### 六 蒙古問題への対応・内面倫理の深化を示すもの

〈大蒙古〉対〈小国日本〉・内村鑑三の日蓮への評価を決定付けたもの

幕府の主戦論対日蓮の非戦論の立場→宗教性の本質を巡る対立 小国日本の大切さ

招福の預言者たちの暴力性・幕府を取り巻く戦勝祈禱呪術者たちの日蓮への過剰な迫害→地震体験を含む迫害の宗教的意味づけ→高度な内面的倫理性の確立

七 終わりに・日蓮的内面倫理の形成→都市商工層の宗教として受容された

日蓮を解り難くさせているもの→日蓮没後の像の変化 都市商工層の利害の反映としての招福祈禱僧としての日蓮像創出と偽遺文の形成→日蓮像の多様性

#### 再度、日蓮の地涌・上行自覚を論ず

——山上氏の批判をうけて——

問 宮 啓 壬

先頃、私、問宮は「日蓮における地涌・上行自覚の再検討」と題する論考を執筆。『日蓮仏教研究』第二号、二〇〇八年に掲載していたのだが、この拙論に対し、興風談所の山上弘道氏より厳しい批判「宗祖の上行自覚について——問宮氏の所見に